

第二部 大元神楽を語る (15:30~16:30)

【パネルディスカッション】

「大元神楽のイマ ―無形文化財制度と民俗芸能の伝承活動―」

【パネリスト】

鈴木正崇

慶應義塾大学文学部教授。専門は、文化人類学、民俗学。アジア各地での異文化研究と日本研究の二つを併存させて研究を行う。1977年から中国地方の神楽を訪ね歩き、大元神楽には1981年の小田地区以来、式年祭の度に足を運んでいる。その付き合いは30年を越えた。主な業績に『神と仏の民俗』（吉川弘文館、2001年）、『祭祀と空間のコスモロジー―対馬と沖縄』（春秋社、2004年）など

本山徳幸

邑智郡大元神楽伝承保存会副会長。市山神友会会長。市山地区に生まれ、若い頃より神楽に親しむ。平成四年より神友会会長を務め、神楽の原点に立ち帰るとの思いを胸に、大元神楽の伝承活動に励んでいる。また、託太夫を務めた二度とも神懸りを成功させるなど、市山の元信仰・大元神楽を支える屋台骨となっている。得意演目は、鬼（鐘馗）、鞆鼓。

鈴木昂太

総合研究大学院大学日本歴史研究専攻後期博士課程。専門は民俗学、民俗芸能研究。中国地方に伝承された神楽、特に、島根県の大元神楽、広島県の比婆荒神神楽、比婆斎庭神楽、を研究している。民俗学の方法で、神楽を伝承する地域とそこに生きる人々がどう変化し、神仏や精霊の世界と関わってきたのかを明らかにしようと考えている。

【パネルディスカッションの概要】

<提題：「市山神友会の伝承活動」>

まずは、司会を務める鈴木昂太より、提題として「市山神友会の伝承活動」の報告が行われた。この報告は、市山神友会の伝承活動を再評価し、これからの伝承活動の在り方を考える議論の土台を提示することを目的とするものである。

報告のなかで鈴木は、神楽はどのようにして伝承されていくのだろうかという問いを、島根県江津市市山地区（市山神友会）を事例にして、さまざまな事情により廃れかかっていた「市山舞」が、復活していった過程を追うことで考える試みを行った。

市山地区の神楽の歴史を振り返ると、現在の「市山舞」の姿になるには、三つの画期となる出来事があった。それは、①市山出身の二人の研究者（牛尾三千夫・竹内幸夫）の活動②国指定重要無形民俗文化財という制度③伝承組織の変化とそれに呼応した伝承の復興活動

である。こうした背景があったために、託太夫を選定し、実際に神を降ろす「本託」を行うとともに、十九もの多様な演目を伝承する市山神友会の今の姿へと結びついたらと説明した。

最後に報告のまとめとして、神楽などの民俗伝承は、古いものがそっくりそのまま伝わるのではなく、時代や制度、人間関係などさまざまな影響を受け、伝えるためにいろいろと変化することで伝わっていくのだと訴える。その際伝承者は、過去・価値・情報などを参照しながら、何を選択し守っていこうとするかを決めていくのであって、市山の場合、大きな影響を与えたのが、牛尾三千夫と竹内幸夫という主導的な研究者・伝承者の存在であり、彼らが生み上げた重要無形文化財という価値だった。彼らが構築した大元神楽理解は、市山の地を伝承の中心地に押し上げ、神事色が強い演目まで村民が担当するようにさせたことで、多くの伝承を守ることにつながっていったのであると結んだ。

＜大元神楽の変遷と伝承活動への提言＞

続いて討論に移り、慶應義塾大学の鈴木正崇氏は、中国地方の神楽の特色が「式年祭」という形式にあることを示し、昭和五十六年に桜江町小田地区で行われた現地公開での神懸かりの話を出された。神楽の季節ではない三月に、本来神懸かりが起きないとされた地区での開催だったため、神懸かりはあまり期待しないでくれと言われていたにも関わらず、「天蓋」の時に自身の後ろから神懸かり状態になった方が飛び出て来た経験を語られ、それまで山間の小さい集落に伝承されてきた神懸かりの神楽が、文化財指定による現地公開という場を経て、新たな展開を迎えたことを示された。

続いて、伝承を上手く伝えていく条件として、①伝承者の技能②伝承組織③出版物など情報集成④研究者との関わり方という、四点を提示された。鈴木氏は、これが非常に上手くいったケースが大元神楽だと考えている。

さらに、竹内幸夫氏の著作を紹介しながら、彼を伝承者でありつつ研究者でもあった稀有な人と評価した。特に、竹内氏が作られた『だれにもわかる大元神楽：伝承読本』（市山公民館、1989年）を例に出し、地元の若い世代に難しい神楽の世界をわかりやすく伝える実践的な本を、地元で作っていくこと、そうした地元からの発信が大切だとまとめた。

＜市山の神楽と竹内幸夫氏＞

次に司会は、一緒に活動してこられた地元の立場から、竹内氏の存在はどのように映るかという質問を市山神友会の本山徳幸会長に投げかけた。

それに対して本山会長は、一緒に山を歩いて探した大元神の鎮座地調査の話をはじめ、竹内先生との思い出は、胸の中に短い時間では話さきれないほどたくさん刻み込まれていると語りだされた。大元舞として相応しいものにしていかなければという思いを胸に、神楽の練習をしたり、話し合いをしたり。一番の思い出は、一つずつみんなと力を合わせて、平成六年に本託の復活をなんとか果たしたことで、竹内先生がいなかったら、市山の神楽は、このようになってないだろうとおっしゃられた。

最後には、私のここ（胸を指しながら）におられる竹内先生を常に思いながら、今後も神楽を伝承していきたいと涙ながらに語られ、本山会長の人柄と神楽に対する真摯な思いが伝わってきた。

＜今後の伝承に向けて＞

続いて司会者から、今後若い世代にどのように伝えていくか、その方策としてどのようなことがあるかとの話題が出された。

それに対して鈴木正崇氏は、特効薬はないので、地域の特性、その地域がどういう歴史を持っているのかを理解したうえで、今後を考えていかないといけないと提言する。

例えば、他地域では、神楽を文化資源として利用して活性化を図っている事例があるとして、安芸太田市の神楽門前湯治村を紹介する。この事例では、神楽が盛んな地域という土壌に、温泉とレトロな街並みが作られたことで、成功したのだと分析した。

また現代は、動画共有サイトで神楽の映像を簡単に見て、いろいろな情報を簡単に得ることができる時代である。そうした影響が、市山大元神楽でも見られ、前回の大神楽の際も、神懸かりの演目では四方八方からカメラが向けられ、こんな状況で本当に神懸かりが起こるのか危惧を抱いたと語られた。

今日見た「五龍王」のように、長い台詞を暗記することが普通に出来た時代から、印刷された文字を読んで、先輩が舞ったビデオを見ながら覚えていく時代へと変わってきているが、書物の知識ではなく、生活や体験から得た、個人の身体感覚を含めた民俗知を、次の世代に伝えていけるかも、非常に難しいが重要なことだろうと指摘する。

最後に鈴木氏は、市山の場合、伝承に関しては素晴らしいものだと評価を述べ、神懸かりに関しては、研究者は重視するけれど、それだけにこだわっていると伝承は難しくなってくるので、舞と口上を今のレベルでどう維持発展させるのか、これをいかに他の地域と連携しながら守っていくのが最大の課題だと思うと指摘した。

＜次の世代へ伝えていくために＞

司会の鈴木昂太は、最後に、今回大阪には神友会の若い方々も来ているが、彼らと一緒に今後どのように伝承を守っていくのか、その意気込みを伝えてほしいと市山神友会の本山会長へ伝えた。

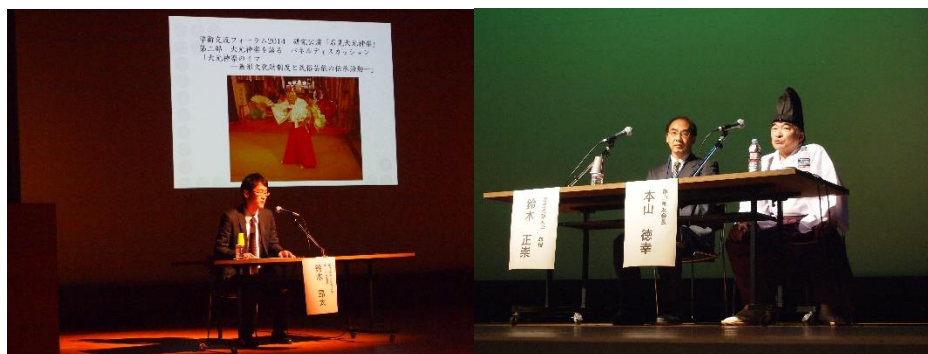
本山会長は、今回の公演には、若い者が五名来ており、彼らには今後の活動に対する自覚として良い機会となったと思うと話された。その上で会長自身の神楽に対する考えとして、新しい創作、共演大会、派手な演出などの新しい神楽と、自分らが伝えている古い神楽、それぞれ二つあって良いと思うとされたが、あくまでも自分たちの考えは、古いもの、地元にあるものを守っていくことで、争うような共演大会には出るつもりはないし、地元中心にやっていると強い口調で語られた。

また、本託の復活について、昔は牛尾宮司が偉大であって、なかなか本託が出来なかった

ことを先輩から聞いているが、衣装が古くても内容を良くしようということで、廃れた演目を七、八人で習いに行ったりして、なんとかしっかりした「大元舞」が出来るようになってきたという苦勞の過程を語られ、こういう難しいことができたのは、メンバーのやる気しかありませんと結ばれた。

最後に本山会長は、大元舞は、七年に一度の開催だが、その中の六年は一つ一つ準備して組み立てていく期間であると言う。今後も若い人たちと一緒に行動し、市山の大神楽はこういうものだ伝えていきたいと力強く宣言された。

こうした未来への決意を胸に刻み、このディスカッションを締めくくった。



今回のパネルディスカッションは、時間が足りずに、議論を十分に深められなかった面があったが、市山の大神楽の歴史を確認し、実感のこもった本山会長の言葉を通して、市山の大神楽のイマを感じられことができたのは良かったと思う。また、こうした舞台がきっかけで、普段地元ではなかなか語ることができない大神楽に対する熱い思いが、会場に来ていた若い伝承者たちへ伝わったのなら幸いです。

平成 26 年度学生企画委員
総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
鈴木昂太